

【近代外交の先駆者 副島種臣】前編

そえじまたねおみ

<概 略>

明治維新の時代は、時代が人を呼んだのだろうか？多くの一流の人物を輩出した。周知の如く数多くの優れた人物を生み出した雄藩が薩・長・土・肥の四藩であった。この内、薩摩・長州・土佐の人物は様々論じられているが、肥前については、あまり人物像は知られていない。その理由は明治維新の直前まで、藩主の鍋島直正が藩士に対し維新運動への活動を厳禁したため、維新に乗り出すのが薩長土に比べ決定的に遅れ、華やかな活動の舞台が少なく、人気に欠け、人々の興味を引かなかつたからである。しかし遅れたとは言え、肥前でも人物はいた。その代表が副島種臣・江藤新平・大木喬任（たかとう）・大隈重信の四人である。



上述の 4 人に鍋島直正、佐野常民、島義勇を含めて佐賀の七賢人と呼ばれている。

この中では、総理大臣を二度務めた大隈重信が最も知られているが、真に肥前を代表する人物は副島種臣であった。人物・識見・手腕のいずれをとっても、副島と大隈は同日の談ではなかつた。即ち比較にならないほど副島は秀でていたのである。知恵・才覚に優れ、自信に満ち、天下の英雄は只我一人と自任していた大隈も副島には全く頭が上がりず、おしゃべりの大隈もいつも一言もなかつた。大隈が何か言おうものなら、副島は「貴様は学問も何も出来もせんで、何が

わかるもんか」とひどく叱りつけるのが常であった、、、と伝わっている。



副島種臣

副島に次ぐ人物は江藤新平である。この人物も佐賀の乱で反逆者とされ非業の死を遂げた為、今日忘れかけているが佐賀の生んだ一世の人物であった。もう一人の大木喬任は四人の中で一番知られていないが、民部卿（卿は後の大臣のこと）・文部卿・司法卿・枢密院議長等、長らく多くの要職を歴任している。

注) 佐賀の乱

1874年（明治7年）2月に江藤新平・島義勇らをリーダーとして佐賀で起こった、明治政府に対する士族反乱の一つである。佐賀の役、佐賀戦争とも。不平士族による初の大規模反乱であったが、電信の情報力と汽船の輸送力・速度を活用した政府の素早い対応もあり、激戦の末に鎮圧された。

<近代外交の先駆>

副島は佐賀を代表する人物であると共に維新の志士としても、他藩の高名な人物に比べて決して見劣りせぬ人物であった。副島の人物を誰よりも高く評価したのは西郷隆盛であり、二人は互いにその人格を敬愛し合った。また大久保利通も副島の人物手腕を深く尊重している。副島は明治元年三月維新政府の参与に、翌年は参議となり、新政府首脳の一人として、西郷・大久保・木戸らと並び立っていた。維新に大きく出遅れて参加した肥前人たる副島が、一躍新政府首脳

の一員に駆け上った事実は、彼の人物才幹が傑出せる証であった。その事を示す一つの例として大隈は後にこう語っている。「維新の際、蒼海伯（蒼海は副島の号、伯は伯爵、明治一七年に授かる）が西郷・木戸・大久保の如き強藩の背景をもたず、早く、既に枢要の地上に上ったのは全くその人格学識、主張の卓越したためであった」.... と。副島が活躍したのは、僅か6年間である。



「帰雲飛雨」 蒼海の号で数々の書を残している。

明治六年の征韓論で下野してから再び政治の舞台に立とうとせず一個の高士（きわめて立派な人物）として世を終えたが、短期的とはいえ副島の果たした役割は大きい。

明治元年から四年までが参与並びに参議の時代であり、この間新政府の基本的な政治体制・官制・法制について中心的役割を果たしたのが副島であった。当時、官制とか法制についての深い知識を持つ者は薩長の有力者には殆ど居なかった為に、副島の才能は必要欠くべからざるものだったのだ。この後、明治四年から六年まで外務卿となった。この外務卿の時代の活躍こそ副島の名を「内外」に高らしめたのである。

200余年の鎖国から目覚めた当時の日本にとって、諸外国との外交は、海外を知らずに過ごした長年の習性から日本人を外交下手にし、維新以降今日まで優れた外交家は数えるほどしかない。副島は近代日本の外交家の中で最も傑出した一人であった。幕末期には高杉晋作等、肚の据わった外交を行った人達もいたが、維新後の我国は陸奥宗光・小村寿太郎という二大外交家を生み出したが、この二人の前に立つ近代日本外交の先駆者こそ副島である。僅か2年間の外相であったが、その外交振りは現在から見ても学ぶものは、はなはだ多く、翻って今日の日本の外交の在り方を深く反省させられるものがある。

＜副島とパークス＞

維新後の日本外交はまことに粗末であった。その原因は明治四年の「廃藩置県」までは国内の改革に精一杯で、とても外交どころではなかったからだ。また鎖国によって外交については全く無知や未熟の点多すぎたからである。しかも諸外国は、近代国家として歩み始めた日の浅い日本を、とかく軽蔑する傾向にあり日本駐在の外国公使は日本政府に対し、何かにつけ無礼傲慢に振舞った。日本政府の対応はまずく毅然たる態度をとることが少なかったため、彼等を益々増長させたのである。

駄目公使のうち最も傍若無人の態度をとったのはイギリス公使パークス（幕末から明治初期にかけて18年間中日英国公使を務めた）であった。彼は東洋を頭から侮辱していた人間で、東洋の劣等民族を従わせるには威嚇に限ると信じていた人間であった。パークスは新政府首脳、三条実美（さねとみ）や岩倉具視（ともみ）にさえ、平気でそうした態度を見せるのが常であった。副島が外務卿となると、パークスは例の調子で恫喝的態度をもって、ある要求を突きつけた。しかし副島は一言でこれをはねのけた。



ハリー・パークス

パークスは「それなら戦争へ訴えるほかない。従来为国交はもはやこれまでだ。」と血相をかえて凄んだ。しかしこの態度で怯む副島ではない。副島は「国際の礼儀をわきまえない足下の如きは公使としては待つ（あつかうという意）ことは出来ない。貴国政府がそういう態度であるなら、帝国政府も考えなくてはな

るまい。この上は談判無用だ。」とパークスの無礼を詰（なじ）り、席を立とうとした。するとパークスは大いに慌て「どうも失言して申し訳ない。戦争など以外の外である。どうか今一度懇談したい。」と詫びてきた。その結果、この交渉は面倒なことなく済んだ。パークスはいつもこの手を用いてきたが副島には通じなかったのである。この件があって、パークスははじめ外国公使は副島を見直し、大いに敬意を払うようになった。

外交に於いて、まず何よりも大切な事は、具体的な外交方策以前のこうした基本的姿勢であり、自主独立国家としての毅然たる正しい気構えであり、肚である。我が国への如何なる侮辱に対しても、断じて屈従しないという態度がいつの時代においても最も重要なのである。立派な人格の上に正しい学問を長年積み重ねた副島にとって、このことは外国交際上の当然の前提であったのである。

<マリヤ・ルース号事件>

副島の名前が内外に知れ渡ったのは、外務卿になって二年目の明治五年六月のことである。それは南米ペルーの船マリヤ・ルース号が航海の途中暴風に遭い、船の修理の為横浜に入港した際の出来事であった。その船に乗せられていた清国人の苦力（クーリー＝労働者）の一人が船から海に飛び込み、逃亡し、半死半生の体（てい）で、この時港内に停泊していたイギリス軍艦に救助されたが、その清国人は船内にいる231名の清国人がペルー人から虐待されていることを訴え出たのである。このマリヤ・ルース号は奴隷売買船であった。当時南北アメリカでは労働力の不足、貧しい清国人を甘言でもってたぶらかし、奴隷として輸入していたのである。

この報告を受けた副島はどう考えたか？ 道義正義を何よりも重んずる副島にとり、それは許されざることであった。いわんや、我が領海内で起きた事件だから断然、我が国の裁判にかけ清国人奴隷の救済を決定する。しかし誰もが考える事は、当時奴隷売買は公然と世界に於いて行われていたし「力」の無い日本としては、余計なことに手を出し、外国との厄介な問題を引き起こさない方が得策だ。清国人が売られようと虐待されようと日本に直接何の関係もない故、「さわらぬ神に祟りなし」で無視した方が良いであろう。しかし副島は違っていた。自分の信条・道義・観念より、この事件を見逃して、日本国の面目何処にありや…と考えたのである。

副島は八方手を尽くして、この事件を処理する権限を外務省に移し、誰からも

干渉されぬようにして特別裁判を設け、その裁判長に、この事件にかかわった硬骨の正義漢である大江卓（たく）・神奈川権令（ごんれい＝今の副知事にあたる・知事にあたるのは県令）を任命し裁判を開始した。この時、副島と大江を誰よりも強く支援したのが西郷隆盛であった。事件の解決迄には外国公使の抗議やら、その他種々多くの障害が生じたが、副島は万難を排してこれを処理し、裁判は日本側の完全勝利となり、清国人全員が解放され帰国できた。



大江卓

支那（中共）はこの歴史に一切触れていない。日本の教科書でも教えられていない。これは近代日本外交に於ける最初の輝かしい成果であり、副島の名声は内外に宣伝された。そしてこの事件を通し、以前にまして、副島は各国公使より深い畏敬と信頼を受けるに至った。

次回は、対清・対韓外交、台湾・朝鮮問題、征韓論に対する副島の活躍を皆様と学んでゆきたい。合掌。

平成 28 年 6 月 27 日

志雲会塾長 有馬正能